

# 幼小教員養成と社会福祉実習

保延 成子\*, 三角 同\*, 深田 倫代\*

(平成15年10月2日受理)

## Training of Infant and Early Teacher and Social Work Practice

HONOBE, Shigeko MISUMI, Hitoshi and FUKATA, Michiyo

(Received on October 2, 2003)

キーワード：幼小教員養成, ソーシャルワーク実践, 社会福祉施設

Key words: training of teacher (infant and early), social work practice, institution of social welfare

### I. はじめに

私たちが、このようなテーマで発表したことは過去に2度あった。初めのは<sup>1)</sup>児童学専攻のカリキュラムに「社会福祉実習」が設置されてから約10年間の状況をまとめたものであった。

2度目のものは文学部心理教育学科におけるケースワーク実習及び児童教育専攻におけるカリキュラム改正(コース制から児童学専攻への実習設置まで)について述べたものである<sup>2)</sup>。本稿は2000(平成12)年度からの児童教育専攻における社会福祉教育(主に実習)について考えてみようとするものである。

これまで児童教育専攻のカリキュラムは小学校及び幼稚園教諭一種免の取得を目的とするということで、福祉関係の科目は社会福祉概論(一年次2単位, 選択)と児童福祉論(二年次2単位, 必修)と三年次の児童福祉演習(選択2単位)だけであった。それが下記のようなのであった。

- |                    |     |
|--------------------|-----|
| 1. 社会福祉概論          | (2) |
| 2. 社会福祉演習Ⅰ         | (2) |
| 3. 社会福祉演習Ⅱ         | (2) |
| 4. 児童福祉論           | (4) |
| 5. 福祉レクリエーション論     | (2) |
| 6. 老人福祉と障害児福祉      | (2) |
| 7. 児童福祉演習          | (2) |
| 8. 社会福祉事業方法論(含む実習) | (4) |

次に「実習」に至るまでのプロセスについて述べておこう。

### II. 実習に至るまでのプロセス

児童教育専攻のカリキュラムには先にも述べたように一年次に選択科目として「社会福祉概論」が開講されていた。受講生は時間割の都合によって、ある程度の変動はあったが二年次の「児童福祉論」が卒業必修単位ということでもあり、大体6割位が履修していた。それが「社会福祉主事任用資格」の取得可能ということで、ほとんど全員が履修登録するという状況になった(担当は本間)。

二年次の前半は「介護等体験」へのオリエンテーションとあわせながら「社会福祉援助技術」について、ビデオを利用しつつ<sup>3)</sup>授業を進めていった。あわせて「児童福祉」の授業も行われている。後期は1999(平成11)年10月に刊行した児童学専攻の実習報告書「これからの生活を考える(8)」<sup>4)</sup>を配布し、自分が実習してみたいと思う機関、施設について考えをまとめていくようにしていった。そして冬期休業中に関係機関や施設を訪問してみることで、その状況を休みあけに聞くことで「実習依頼」の作業を進めていった。

春休みを終え、新学期になっても決定できないでいる学生たちに対しては個別に対応しながら話し合いを行ない、5月の連休前には全員の実習先を決めることができた。そして、ほとんどの学生が夏休み中に実習したのであった。実習中の訪問指導も何とか終わることができた。後期は各自、反省会のためのレジメを作成し発表するとい

\* 児童学科・保育科

う授業形態をとった。提出されたレジメの語句などの訂正の後、まず学生たちがフロッピーに打ち込み、初めての実習報告書「出会い・スタートです」を作成、各実習先に送付することで、初めての児童教育専攻における実習指導を終えたのであった。

### Ⅲ. 学生たちへのアンケートから

実習反省会の終了後、学生たちへのアンケートを試みた。

(イ) まず履修の動機からみておこう。次のような回答がみられた。

- ・児童館や保育所に興味があったから
- ・理論だけではなく、現状を知っておきたいから
- ・いろいろな現場を見てみたいから
- ・より多くの経験をし、実際の現場で体験したいから
- ・社会福祉主事の資格を取るため
- ・福祉が大きな役割を果たすと思ったから

(ロ) 次に実習先の決定についてであるが、(1)実習先の選択肢がほしい(自分の行きたいところとは異なっていた)という意見、さらに自己開拓は自主性が育てられ意識も高まる、というような回答もあった。

(ハ) 実習の時期(夏休み中)についてはどうであろうか。次のような回答であった。

- ・実家に戻る機会もあったので夏休み中で良かった
- ・子どもも夏休み中でたくさんいたから良かった  
(児童館)

- ・学校があり、忙しい時期に行くよりも夏休み中の方が良いと思った
- ・夏休み中の方がイベントが多く平日とは異なって良かった
- ・日常生活の様子がみられるから平日の方が良い

このような回答のなかで「休み中はさけたかった」という回答もみられた。

(ニ) 最後にオリエンテーション・エヴァリエーションについて、フリーに書いてもらったところ、質問がフuzzyなこともあり、実習先でのオリ・エヴァについて書いている学生もいたが、エヴァについてはおおむね次のようにまとめられる。

- ・他の学生の実習状態や感想をきくことができて良かった
- ・発表をするだけなのであまり意味がない

- ・自分の実習外の他の施設のことを詳しく知ることができて良かった

### Ⅳ. 実習報告書「出会い・スタートです」から

初めての報告書は317ページという、大部のものとなった。そのなかからランダムに感想を抜き出してみた。

#### A (千葉県市川児童相談所で実習して)

児童相談所での実習一日目に、小さな男の子と出会った。市川児童相談所はとても狭く障子がやぶれてしまっているような、決して恵まれた環境ではないはずなのに、その男の子は、「ここ綺麗でしょ。」と言った。その一言から、もっとすごい現状にいたことを思い知らされた。

始めは、保護されている子どもを見るだけで、涙が込み上げてくるような辛さがあったが、実習をするにつれて、この子たちに自分ができることは何かという気持ちに変わった。この実習で、親の身勝手に子どもが犠牲になっているという印象を強く受けた。虐待の例や、子どもの問題を身近に感じたが、同時に親の問題を多く感じた。

一時保護課で、問題を抱える子どもと接し、子どもはたまにポツリと弱音や、淋しいことを口にしたりしていた。そのような一言を聞いてあげるだけでも、私はこの子達の役に立っているのではないかと感じた。全部受け入れてあげる気持が大切だということを学んだ。この実習での経験を忘れずに、これから子どもと接していきたい。

私は、この実習が始まるまで児童相談所というところがどのような所なのか知りませんでした。一時保護課にいる子ども達は皆家庭に何らかの事情を抱えている子達です。だから、暗くて、あまり元気がない、そのようなよくないイメージを持っていました。しかし一緒にいると元気で明るくて、いつも子ども達の騒ぎ声や笑い声が溢れる楽しい場所でした。

職員の方に保護児童の事情を聞き、ショックを受けました。けれど、心の中には重い、苦しい現実を背負っているはずなのにそんなことは微塵も感じさせない子ども達の姿を見て少しほっとしました。子ども達は強く現実を生きる力を持っていると思いました。そんな子ども達の姿を見ることができて良かったと思います。

#### B (東京都児童相談センターで実習して)

実習では、担当福祉司の方をはじめとして、施設職員

の方から、様々なお話を聞かせていただきました。また、本来、一個人としてはすることのできない体験に驚きの連続でした。中でも非常に印象深かったのは、一時保護所での1日実習と小学校への訪問でした。

一時保護所では、幼児部と学齢部のうち幼児部のほうで実習させていただきましたが、子どもたちが置かれている現実には、言葉も出ないくらいの衝撃を受けました。一見、どこにでもいるような子どもたちなのですが、関わっていくうちに別の一面が見えてきて、私は子どもたちの愛情不足を感じずにはいられませんでした。小さい体についた無数の青あざや火傷の跡が痛々しく、本当に胸が痛みました。

小学校のほうでは、実際の現場における子どもたちを取り巻く問題を肌で感じることができました。どのケースにおいても、本当に複雑な背景があるように思いました。しかし、それは親の背景でもあり、親のためにそのような境遇に置かれているような気がして、やりきれない思いでした。学校からはいくつかの相談を受けましたが、そのうち母親のネグレクトによるケースについては私に大きな衝撃を与えました。親から十分な愛情を与えてもらえず、晩ご飯がチョコレートひとかけらといった十分な食事も与えられない兄弟。そんな生活を知っても何もしてあげられないという現実には、自分の無力さやふがいなさを感じました。何の罪もない子どもたちが、どうしてこんな目にあわなければならないのでしょうか。

今回の実習では、児童相談所全体から考えればほんの一部ですが、私にとっては本当にたくさんのお話を聞き、学ぶことのできた10日間でした。今回の実習は色々な意味で、私の今までの価値観や考え方をすっかりくつがえすようなものでした。しかし、それは私にたくさんのお話を聞き、考える時間を与えてくれたように思います。私は今回の実習がなかったら、こんなに大変な思いをしている子どもたちがいるということをこの先もずっと知らずにいたと思います。そして、児童相談所という場所に関しても間違った理解をしたままだったと思います。児童相談所という所は見た目や響きは何だか冷たいけれど本当に援助の必要な子どもたちのためにある、あたたかい機関であると思います。児童相談所については報道などにより、間違った認識をしている人も多いのだという話でした。だからせめて子どもたちと接していく人には、児童相談所について正しい認識を持っていて欲しいと思います。

#### C (茨城県つくば市福祉事務所で実習して)

私は児童学科であるから、周りに子どもとかかわる仕事に就きたいという人はいても、お年寄りとかかわる仕事に就きたいという人はいなかった。

だから、介護福祉士を目指していた私と同期の2人の実習生や、実際に高齢者施設で働く人々がなぜお年寄りとかかわる仕事を選んだのか不思議だった。私にはただのきつい仕事にしか思えなかったのだ。

しかし、この実習を通して私の考えは変わった。実習の講義の中で『あなたはもう子どもにはなりません。あなたは障害者にはならないかもしれませんが、でも、高齢者には誰もがいずれなるのです。だから、高齢福祉は、お年寄りのための福祉ではなく、あなたのための福祉なのです。』という言葉があった。私にとっては大変衝撃的な言葉であった。このようなことを考えたことはなかった。様々な高齢者の方とかかわっていくうちに、この言葉の意味がわかったような気がする。それまでは他人事だった高齢福祉がとても身近に感じられたのだ。

ともに実習をした2人に、なぜお年寄りとかかわる仕事に就きたいと思ったのかを尋ねた。「お年寄りと話するのが好きだから、おじいちゃん介護のお世話をしたから」という答えが返っていた。考えてみれば、これは子どもとかかわる仕事に就きたいと思っている私たちと全く同じ志望理由ではないか。子どもが好きだから、幼い兄弟の面倒をみていたから…

10日間という短い期間ではあったが、高齢福祉を肌で感じ、自分なりに高齢福祉について真剣に考えた日々であった。私の中の高齢福祉は大きく変わった。高齢福祉の厳しい現状と、さらに多様で柔軟なサービスの必要性を感じるとともに、高齢者の方々と彼らにかかわる仕事の素晴らしさを知ることができた。

#### D (東京都大田区徳持児童館で実習して)

児童学を学んできたにもかかわらず、実際に子どもと接するのは久しぶりで、改めて子どもというものについて驚きが沢山あった。「やりたい!」という意欲、関心の強さ。順序、順番、きまり事に関しての意識。観察力の鋭さ。普段の大人の生活の中では曖昧にうやむやに成り立ってしまっていることでも、子どもの世界ではそれが成立せず、よく見ているから普段の自分にぎくりとしてしまうことが多々あった。これから子どもの世界で働

いていきたいと思っているのだから、少なくとも悪いお手本にはならないように気をつけていかなければと焦りを感じた。

今まで、私は人に対してその人はその人だからと干渉介入するのは避けてきた。だが、その感覚のまま子どもの世界に入ってしまうと、確実にいじめなども見逃す教師になるのではないだろうか。実習中、何度となく子どもたちの問題に、本人たちのことだからといって介入しないでもいいのか、どこからを私たち大人が介入していいのか、介入すべきなのかと考えていた。

そんなことを頭でかちち考えているあたり私はどうしようもないのだが、ほっといていつか経験から育っていくことなのか、それとも大人が口で言っているのか、それには見極める目が必要。TPO。やはり伝えていくべきものは伝えていくべき。そして伝えるためには、信頼関係が築かれていることが前提となるような気もする。

正直、子どもの世界にこれからかかわっていくことに迷いがあった私だが、この実習を通して子どもと直接かかわり、子どもにも、職員の先生方にもいろいろなことを教わり、やはり子どもの世界に携わっていききたいという想いを増すことができたように思う。

#### E (埼玉県越谷市立児童館「コスモス」で実習して)

私はこの10日間の実習を通して、ますます子どもというものに興味を覚えた。自分の頃とはまた違う現代の子どもたちに直に触れ、感動したり、感心したりした分、改善すべき点や今後の課題も見えた気がする。子どもの見る目・観察する目は鋭く、自分にもその目は向いているのだとはっとさせられることが多くあった。自分も子どもを取り巻く環境の一部なのだと改めて気づかされるとともに、自分自身そのように強く言い聞かせる毎日であった。

「子どもの良いところはのばし、悪いところは改善しながら、伸び伸び元気に育成すること」が児童館の役割の一つである。そのために児童館では遊びの場や機会を広く、多く提供し、それを通して子どもたちが様々な体験や経験、交流をし、育つ力となっているのである。現に実習中、遊びを通して子どもが目に見えて成長していると感じられる場面に何回も出会った。子どもにとって「遊び」は、成長を支える一本柱だと大学の机で平日頃学んでいることを、体験として感じ学ぶことができたように思う。貴重な体験をさせて頂いた。

10日間という短い期間であったが、子育て中の親御さん方また現代の子どもたちを実際に見させて頂き、児童館というものが本当に多くの機能を果たしているのだと実感した。これから学校週5日制や総合的な学習の導入などから、ますます児童館の役割は増えてくるであろう。利用する人々のニーズに応え、児童館のさらなる発展を期待したい。また10日間で学んだことを、ぜひ今後子どもと接する時の手だてとし、生かしていきたいと思う。

#### F (埼玉県鴻巣市立児童センターで実習して)

今の子どもは、「生きる力が足りない」と言われているが、生きる力(子どものパワー)をだす場所(環境)がなかったり、子どもをあそばせ、遠くから見守ってくれる大人がいないために起こってしまう現象だと思う。また、実習中に学校に通わず家庭でも問題を抱えるA君に出会った。A君は、毎日児童館に遊びにきている。虐待や不登校といった子どもに関わる問題が複雑化し、増加している今、学校でも家庭でもない、大人も子どももいる児童館という場所は必要な大切なものになっていくと思う。それだけ児童館の担う役割も多くなると思う。しかし、子どもの不登校の責任問題を調査し虐待の調査をすることも、大切ではあるが、まず子どもが頼れる顔なじみの大人が身近にいること、気にかけてくれる大人の存在が、子どもにとって必要なのではないか。

児童館(隣接する学童保育含)に来ている子によく見られるのはみんな愛情不足のような気がした。「親の愛」「先生の愛」「友達への愛」「大人の愛」。児童館という“先生”でも“親”でもない場所で、子ども達は自分なりの表現で、本当の自分をみせているように感じた。

この10日間の実習で、今の子どもがおかれている状況を知り、自分の課題もみえてきた。子ども達を受け止められるそんな存在になれるように、これからも人生経験をつんでいきたいと思いました。

#### G (さいたま市向原児童センターで実習して)

実習は夏休み中だったので、子どもたちと多く関わる事が出来てよかったです。児童センターという場を良く知らなかった私には、センターはとても良い場だと思いました。

遊ぶ場が少なくなった現代においては、もっと増えて欲しい場であると思います。子どもが遊ぶだけではなく、親同士の情報交換の場として欠かせないと感じました。

ここに来れば悩みを吐き出せる、という場がある事は専業主婦にとっては特に心強いと思います。でも、その反面で親同士の話に夢中になりすぎて、子どもの相手をまったくしてあげない様子も多くみられました。

乳幼児期は特に、母親が1対1で向き合うことが大切だと思うので、もっと子どもに目を向ける姿が増えたら嬉しいです。私たちはこのような母親たちと、これから関わっていく事になるので、とても大変だと感じます。どのように信頼関係を築いていくのか…自分たちの輪に固執している母親たち、こちらが挨拶をしても反応のない母親たち、を相手にするのはとても難しい事だと思いました。けれど、この現実、どのように対応していくか考えていく必要があると思いました。

そして、子どもたちは多少の地域性はあると思うけど、皆純粋なのだと思います。そんな子どもたちがフッと思ったときに気軽に遊びに来られる、そんな場であるセンター。この存在をもっと知って欲しいし、利用して欲しいです。

このような「場」を提供し、一歩下がった位置で冷静に見守る職員の方を見て、気負っていた私には、このような子どもとの関わり方もあるのだと知り、とても勉強になりました。今の現状を知る事が出来た今回の実習を今後役に立てていきたいと思っています。

#### H (愛媛県松山市中央児童センター、石井保育園で実習して)

今回、私は地域子育てセンターを中心に実習を行わせていただきました。核家族が増え、近所付き合いが希薄になり、兄弟も少なくなり、子育て経験もなく、相談する相手も近くにいない……という現状に陥っている現代において、市町村からの地域からの援助が必要とされるようになりました。支援センター自体、私の幼い頃にはまだ存在していなかったものなのでこの数年で設立されたものです。

ただし、支援センターは子育ての相談などのその場しのぎの対策を目的としたものではありません。支援センターがなくとも地域での助け合い、地域での子育てが行われる時代が来るように、そのきっかけを提供する場なのです。親同士の繋がりを作る場なのです。実際、園庭開放や親子ふれあい広場で近所の仲間を作って帰る方もいらっしゃいました。ただ、この場合は近所に同じ子育て仲間がいるのに気づかないという現状に驚くべきかもしれません。そこまで深刻になっているということなの

だと思います。

また、保育士など専門の方には話し辛いこともあるようです。同じ仲間に相談するほうが、気軽に話せるようです。相談という大げさなものではなく、世間話のように、子育ての不安を打ち明けたり、情報を交換し合ったりしていました。悩んでいるのは自分だけではないことを知ることができ、大きく構えすぎるのではなく余裕を持って子育てと向かい合えるようになるのではないのでしょうか。そうすることで、子育てのストレスからも解消され、結果として虐待などを未然に防ぐことにも繋がるのだと思います。

支援センターが設立されてからまだ数年ですが、これから活動が広がり、いつの日か支援センター自体は存在しなくなり、その考えや活動だけが残されるようになって欲しいと思います。

#### I (埼玉県加須市立第4保育所で実習して)

本当に短い間の実習であったが各々のクラスへ入り、子どもたちの様子を直に見たり感じたりすることができ、よい経験ができた。

私は、子どもの成長・発達の過程を見ていくために年齢の低いクラスから実習をさせてもらった。1～2歳児クラスは基本的な生活習慣の自立を大きな目標としており、ひとりひとりをきちんと把握した上で指導をしていた。基本的な生活習慣はとても大切なことなので辛抱強く時には厳しく援助を行う。これは3歳児クラスでも引き続き行われており、生活のリズムの中で繰り返し何度もやっていかないと身につかない。3歳児クラスの子どもたちは言葉(語彙)も増えてよく話し、自分の意志を伝えることが多くなってきた。自己主張が強くなり小さなことで言い合い・小競り合いになることもあった。遊びも2歳児とは異なり、1人遊びより共同遊びの方が多く、自分なりの楽しみを見出して遊んでいた。4歳児クラスの子どもたちは創作して絵を描いたり、物を作ったりすることが好きな子どもがたくさんいた。少し手伝ってあげるだけで立派な「くじ引きセット」を作っていて、本当に子どもの創造力に感心した。子どもにとっての1年の大きさに改めて感激した。

特に5歳児クラスの子どもたちはあと半年たった小学生である。今の7月の姿からは教室の椅子にきちんと座って授業を受けている姿を想像することは難しかった。けれども半年もあれば成長しているのだろう。5歳児ク

ラスでは就学前ということも意識しながら活動が進められているため、当番活動や自分ひとりの手でする活動が多く、行動への自信や責任感が養われている。手先も器用になりつつあり、折り紙を上手に折っていた。外遊び中には3歳児にやり方を教えたり、面倒を見たりと年長という威厳も少し感じさせていた。

私は幼稚園に行っていたので保育所に行くのは初めてであり、双方の違いやよいところを見る事が出来て良かったと思う。子どもの個性に合わせて言葉がけや支援をしていく保育士という仕事の大変さを実感したと共に、必要とされていることもわかった。親ではできないしつけや社会性を身につけることなど、保育所ならではの支援・援助も子どもには必要なのだと感じさせられた。

子どもに関する実習は養護学校以来であったので初日は緊張して戸惑っていたし、やっと慣れてきたところで最終日を迎えてしまい悔しく思う。それでも子どもたちから学ぶことは大いにあった上、先生方の支援・援助を見ていてとても勉強になった。いろいろなことに気づかされ、感じ、自分に足りないもの必要なものを見つけることができた。保育所実習で学んだことや経験したことを生かし、今後の自分の活動を充実したものにしていきたいと思う。

#### J (神奈川県横須賀市立森崎保育園で実習して)

この実習が、保育園の子どもと触れ合う初めての機会だったので、当初、戸惑うことがしばしばあった。しかし、子どもは素直な心で思いきりぶつかってきてくれた。だから、私も子どもの中へすんなり入って、戸惑いや迷いを解消することができた。そして、もっともっと多くの子どものことを'知りたい'理解したい'と思い、心身ともに、子どもと多く接していけるようになった。

この10日間を振り返りつくづく思うことは、子どもと子どもを取り巻く世界の広さと、面白さと、そこに関わっていくことの楽しさと、難しさだ。保育活動の中で、保育者が子どもに、“してあげるべきこと”“させるべきこと”を知り行う上で、どうしたら子どもが、より良い生活を送ることができるのか、考えることは大切だが、とても難しい。しかし、子どもを本当に理解したいと思っているなら、いかようにもなるだろう。そして、子どもを本当に愛しているなら、子どもの世界とじっくり付き合っていく中で、子どもを満たすことができるだろう。それは、経験・技術の少ない私との関わりの中でも、多

くの子どもに、溢れる笑顔が生まれていたからだ。

保育をするとき、また、様々な福祉活動を行うとき、あらゆる面で技術は必要だろう。しかし、結局は、子どもを、またその活動における対象者を愛する気持と、彼らと過ごすときを好きと思える、豊かな心と、意欲が、何よりも一番大切なのではないだろうか。

この実習で、子ども達や保育士の方々から学び、考えさせられた多くのことを、私の宝とし、他者を理解するという奉仕の心を、これからも忘れず、日々生活していきたい。

#### K (新潟県五泉市立すみれ保育園で実習して)

実質8日間というとても短い実習期間でしたが、とても充実した時間でした。子どもたち一人ひとりのことを温かく見守ることはもちろんのこと、その中から今の発達段階としてどんな姿を子どもに期待するかをはっきりもち、そのためには今、どのような環境を用意し、言葉がけをしたらよいかということを知るために、子どもの生活するいろいろな面から一人ひとりの様子を把握していくことの重要性を学びました。

また、実習中、保育には重要な「言葉がけ」について考えさせられることがありました。いつも何気なしに使う『がんばって』という言葉。深いことを考えずに応援するときに使っていました。この言葉は乳児にとってあまり適切ではない言葉ではないかと感じました。何気なしに使っていた言葉が、子どもの気持ちを無視し、大人の都合のために発せられている言葉があることに気づき、そのことについても考えなければならぬと感じました。

そして、子どもたちを受け入れる環境について保育士さんと話したときに、時間的・空間的・物質的環境の他に『子ども達を信じること・任せること』も大切な環境であると教えていただきました。まさにそのことがなければ、子ども達に対して良い保育が行える環境がそろわないと思いました。

毎日たくさんのことを保育士さんや子ども達から学び、驚き、考え、感動させていただきました。8日間の経験を大切に生かしていきたいと思えます。

#### L (ヒューマンサービスセンターで実習して)

実習半ば相談員の方にある相談者の内容について話を

聞かせていただくことがあった。その内容はまるでドラマの物語のようであった。その内容は秘密厳守なので言ったり書いたりすることはできないが、私の身の回りには起きそうもなかったのでそんなことが本当にあるのかと正直信じられなかった。しかし相談員の方は「普通とか皆とか常識とかいう言葉では考えない。世間の常識で考えるのではなく、目の前にいる、その人の痛みや苦しみを聞き、考えることが必要である。」とおっしゃられた。そのとき私は自分がいかに狭い世界でしか物事が考えられていないのだろうと思いはっとした。

親や友達に言えない悩みを無料で匿名で語る場所があったらとても心強い。そんな居場所であると実習を行ない感じることができた。また、このセンターの職員の方は相談者の方、くつろぎスペースの利用者に対してもとても温かく優しく、自分以外の人のことを真剣に考えて接することが出来るのは素晴らしいことだ。

この実習を通して、相談とは相手が自分に何を伝えたいのだろうかということに集中して話を聞く、まず聞いてから出発するということがわかった。人の話を聞くということは相手を思うことであってそれがコミュニケーションの基本である。

聞きたい、知りたい、理解したいという気持ちで聞けばいつかは心が通じ合う事が出来ることがわかった。

#### M (東京都聴覚障害者生活支援センターで実習して)

今回の実習をさせていただいた、このセンターは、細かくプログラムが決められているわけではなく、個人個人の状況によって支援することが異なっていた。また、センターの中では、同じ障害を持った人たちが生活しているの、聴覚障害がセンター内の生活に支障をきたすことは少なかった。だから、実習に行き、支援をする、何か入所者のために働くという感覚は少なかった。それよりも、聴覚障害者の方にはどのような方がいるのか、どのような生活をしているのか、どのような問題に直面しているのかを知ることの方が、大きかったように思う。

入所者の中には、自分の意思を伝えるためである手話や文字がスムーズに使えない方たちがいる。聴覚障害者以外の社会に出た時、それは大きな障害となる。しかし、それは、聴覚障害者以外の方が多いためそう思うだけのことだ。聴覚障害者も私たちと同じように様々なことを感じながら、生活している。ただ、意思の疎通が健常者とスムーズに行かないだけだ。お互いに相手のことを知

りたい、知ろうという気持ちさえあれば、意思の疎通はできる。センターに来て改めてそう思った。

手話をまったく知らないで実習に行ったので、ちゃんと入所者の方たちとコミュニケーションがとれるか不安だったが、みんな裏表のない方々でよいところは誉め、悪いところは注意してくれるので、良い環境の中で手話を覚えていくことができた。手話はただ手を動かすだけではなく、表情や体の動きからも表現していくと相手に伝わりやすいことから入所者や職員の手話はちょっとしたパントマイムのようにとても表現力のあるものだった。

就職活動中の入所者でいくつか会社の面接を受けた方がいた。事務関係の仕事を希望していたが残念ながら不採用だった。工場などの作業なら少しは枠があるが、他の職はなかなか受け入れてもらえないのが現状だ。アパートを借りるときも同じでなかなか大家に受け入れてもらえず、職員が仲介に入りながら少しずつ交渉していくとのこと。このように障害者の将来というものは不透明で不安定な部分が多いので、早く彼らが何の心配もなく自立して生活できる社会になって欲しいと思った。

#### V. おわりに——教育と福祉の統合をめざして——

これまで初めての児童教育専攻の学生たちの実習状況について述べてきた。実習した機関、施設と人数は次のとおりであった。

児童相談所等	8ヶ所	11名
福祉事務所等	8ヶ所	9名
児童館	26ヶ所	29名
保育所	22ヶ所	22名
その他	9ヶ所	10名

ちなみに2年目の今年(2003年)の実習先および履修学生数は下記のとおりであった。

児童相談所	4ヶ所	7名
福祉事務所等	5ヶ所	5名
児童館	38ヶ所	34名
保育所	28ヶ所	31名
その他	7ヶ所	7名

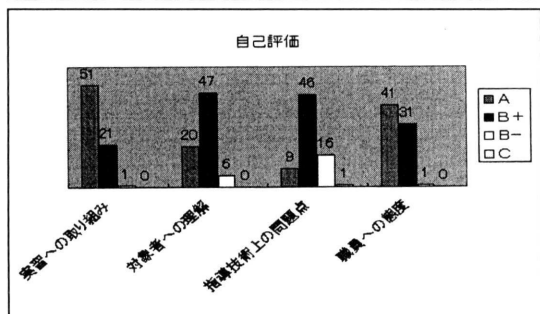
みられるとおり、「児童館」及び「保育所」での実習がほとんどである。児童学科ということ、又「社会福祉」系大学の増加によって児童相談所や福祉事務所などでの実習は難しいものがある。来年度から始まる「育児支援」専攻の実習とあわせて考えていかなくてはならないので

あろう。

さいごに「実習評価」についてみておくことにしたい。評価項目は4つ、そのそれぞれについてAからDまでのポイント表示をしていただくようになっている。実習先での評価と学生自身による自己評価を種別にかかわらず単純に集計してみると次のようになった。

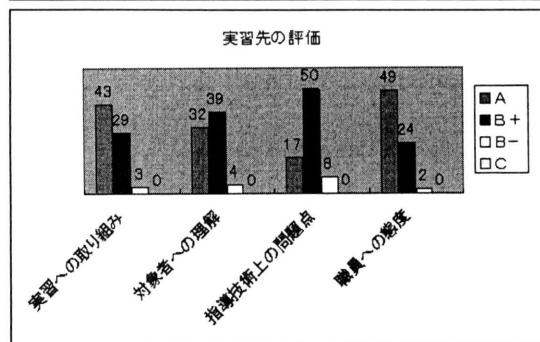
自己評価

	A	B+	B-	C
実習への取り組み	51	21	1	0
対象者への理解	20	47	6	0
指導技術上の問題点	9	46	16	1
職員への態度	41	31	1	0



実習先の評価

	A	B+	B-	C
実習への取り組み	43	29	3	0
対象者への理解	32	39	4	0
指導技術上の問題点	17	50	8	0
職員への態度	49	24	2	0



ここで「実習への取り組み」及び「指導技術上の問題点」という項目において、学生と実習先との評価に、微妙なズレがあることに気づくのであるが、この点はさら

に実習先の種別毎にみていく必要があろう。

評価表にはさらに「大学への要望」という欄が設けてある。学生への評価とは別に受け入れにあたっての、指導上の問題点など、自由に記入してもらっている。その主なものを種別毎にとりあげてみよう。

福祉事務所

- ・実習記録の様式を考えてほしい
- ・事前に福祉事務所のどんな部署(高齢・児童・母子・障害等)で実習をしたいのか希望を書いてほしい
- ・8月のお盆は日程を配慮してほしい

児童相談所

- ・日誌の様式化(実習現場に負担にならない内容の実習日誌が必要)
- ・評価基準を示してほしい
- ・実習機関に関する事前授業を深めてほしい

児童館・児童センター

- ・8月のお盆の日はさけてほしい
- ・各自がテーマみたいなものをもって実習に臨んでほしい
- ・事前学習が必要
- ・資格取得のためだけで実習しているのでは?
- ・いきなり実習に入るのは学生がたいへんなので、実習前にボランティアを推進してほしい
- ・夏休み中は終日、子どもがいて実習生への対応ができない
- ・課題意識をもって取り組んでほしい

保育所

- ・目的意識をもった実習を行ってほしい
- ・常識のある態度が身につく指導をしてほしい
- ・形式的な実習日誌を準備してほしい
- ・社会福祉は範囲が広く、保育所だけではほんの一部分しか理解できないのではないか

その他

- ・事前に訪問し、様子を知ったうえで実習にのぞんでほしい
- ・事前学習をしてほしい



- ・連続(連日)ではなく、週2～3日(数週間)で行ってほしい

これらは何れも当然のことであり、実習指導を担当する教員がつねに心がけておかななくてはならないものであろう。そのためにも「テキスト」<sup>5)</sup>の果たす役割は大きいし、教員自身がルーティン化することなく、フレッシュな気持で学生たちとかかわっていくことが望まれている。子どもたちの成長・発達にとって福祉と教育が現代において分離していることは決して望ましいことではないと思われるだけに……。

#### 註

- 1) 三角・保延「保育者養成と社会福祉実習」東京家政大学研究紀要 第27集 1987
- 2) 保延・三角「保育者養成と社会福祉実習―(2)」東京家政大学研究紀要 第41集 2001
- 3) かつて日本社会事業学校連盟(実習教育委員会)が作成した次のものを利用した。(イ)「自閉症児へのケアワーク」(ロ)「身体障害者更生施設におけるソーシャルワーク」(ハ)「老人ホームを利用する人々への援助―ソーシャルワーカーのかかわり方」
- 4) 他にいくつかの大学から寄贈をうけた報告書を参考にさせていただいた。記して感謝します。(イ)「2002

- 年度実習報告書―CLOVER―」高知女子大学社会福祉学部(ロ)「福祉実践に学ぶ―2002年度現場実習報告書」龍谷大学社会学部(ハ)「よーい、どん!―2002年度実習報告集」東京都立大学人文学部(ニ)「私たちの実習体験―2002年度社会福祉援助技術現場実習報告書」沖縄大学人文学部(ホ)「創る生きる―実習報告集No.3」立教大学コミュニティ福祉学部(ヘ)「社会福祉実践者をめざして―介護実習報告書第19集」共栄学園短期大学社会福祉学科(他)
- 5) 私たちのものとしては次のものがある。「改訂版幼稚園・保育園実習の常識―成果をあげるポイント66」及び「新版施設実習の常識―福祉を実践するための66項」何れも(株)蒼丘書林

最近のものとしていくつかあげておこう。

- (イ) M. Doel(他)「社会福祉実習をどう教えるか―英国の実習指導者のためのテキスト」誠信書房 1999
- (ロ) 岡田(他)「ソーシャルワーク実習」有斐閣 2002
- (ハ) 岩本(他)「教育実習を考える」北樹出版 2003

#### Abstract

We presented by educational training of nursery nurses and social work practice in the past. This paper is cleared in social work practice and training of early school teacher.

It is integrated that the policy between education and social welfare for children's growth and development.